

【 追 悼 】

胡日恒先生の逝去を悼む

日本熱測定学会会長 村上幸夫

3月の末、近畿大学の木村先生を通じて、中国熱測定学会会長の閻海科教授から胡先生ご逝去の知らせを受けた。西安で開催された第3回日中熱測定会議に出席されておらず、少しお体の具合が良くないとは聞いていたが、こんなに早く、突然亡くなられるとは想像もしていなかったので、知らせを受けたときはショックでした。

先生との個人的なお付き合いはあまりありませんでしたが、杭州の第一回日中熱測定会議、北京のIUPAC化学熱力学国際会議そして大阪の第2回日中熱測定会議と3回お会いした。中でも大阪での会議で先生と2人で司会したこと、また、杭州・西湖の船の中で次回の大阪会議について熱心に話されたことなどが、思い出として心に残っています。

日本熱測定学会と中国熱測定学会が今日のように非常に友好な関係を保つことができたのもひとえに先生が日中の将来を考え、熱心にその基礎を築いていただいたからと感謝しています。この夏大阪・千里で第14回化学熱力学国際会議が予定されていますが、先生はこの会議への参加および成功を願っておられたことと思います。それだけにこの時期に亡くなられたことは残念です。後に残された日中の



研究者がこれからもますます友好な関係を築くことを心掛けていくことが先生に報いる方法であると考えます。ここに日本熱測定学会を代表し、先生のご逝去に心より哀悼の意を表すとともに中国熱測定学会の発展をお祈りします。

胡日恒先生を偲んで

近畿大学理工学総合研究所 菅 宏

去る3月31日、中国科学院化学研究所の胡日恒 (Hu Riheng) 先生が心臓発作で急逝されたという悲しい知らせを、お弟子さんの一人閻海科 (Yan Haike) 教授から電子メールで受け取り、しばらく茫然とした。以前に軽い脳梗塞で入院されたことがあったが、失語症の後遺も懸命なりハビリで克服され、元通りとまではいなくても元気を回復しておられただけに、ショックも大きかった。

日中交流の端緒となる重要な役割を果たして下さった、大変貴重な人物を失ったものである。思い返せば、1980年秋に突然お手紙を頂戴し、熱測定分野で日中交流を始めたいと思うが、如何お考えでしょうか？もしご賛同頂けるなら、日中二国間協定にしたがって中国にご招待したいとのご提案であった。もちろん異議のある筈がなく、閻先生も強くご賛成下さったので、'Seeing is believing' の言葉と

ともに、喜んでご招待をお受けする旨の返事を認めた。1982年春、閻先生と一緒に始めて中国の大地を踏んだのが昨日のこのように思い返される。北京空港には胡先生

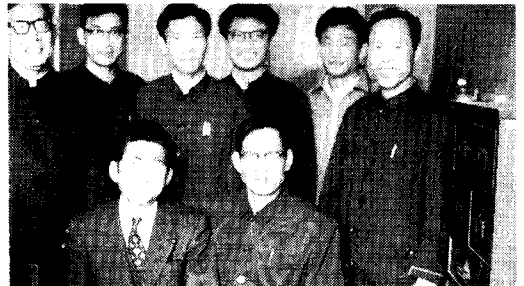


写真1 化学研究所にて

初め主だった方々がお出迎え下さり、一週間にわたって丁寧なおもてなしを受けた。その夜は科学院の方々も加わった歓迎会が催され、胡先生は絶えずにこやかに私共の側にいて気を使って下さった。手紙の書き方から想像した通り、物腰が柔らかく温和で控え目な性格で、一遍に信頼できる人との印象を受けた。

講演会では英語を十分に理解できない人達のため通訳の勞を取って下さり、4時間に及ぶハードな作業を淡々とこなされた。なんの打ち合わせもないぶっつけ本番で私の拙い英語を通訳して下さいたからには、相当の語学力の持ち主に違いない。後で伺ったことであるが、胡先生はGiauqueのお弟子さんに当たるJohnston教授の下で学位を取られたとのことであった。他の研究所への見学、万里の長城や紫禁城などの観光、晩餐会など結構忙しい日々が続いた。一夜、有名な魔術団のショーにご案内頂いた。奇術の種がまったく判らないままにいますと、ニコニコ笑いながら「貴方は自分の見たものを信ずるか?」と聞かれた。咄嗟に Seeing is believing と書いたことを思い出し、返答に窮したことを憶えている。しかしこの言葉は、その後の私達の間のキーワードとなった。逢う度に信頼を深め合うという意味である。写真1は、関先生が記念にと撮ってくださったもので、私も若かったし、他の人達も若かった。十数年経って胡先生のみが別世界へ旅立たれようとは夢想だにできなかった。

同年秋に、日本学術振興会の招聘で来日された。一日、勝尾寺と箕面の龍で遊び、帰りの道でゆっくりと将来の計画を話し合った。実に率直な意見交換ができたのもお人柄の賜物であろう。自宅に辿り着いた時は日も暮れており、粗食ながら日本食を味わって頂いた。家内も大変好印象をもったようで、そのご何度も胡先生のことが我が家の話題を賑わした。阪大で数日ご滞在後、仙台で行われた第18回熱測定討論会にご出席頂き、中国熱測定の現状と題する講演を伺った。流暢な英語の講演を憶えていらっしゃる方も

多いと思う。座長となられた関先生が黒板に一衣帯水と書かれて、両国の強い結びつきを強調されたことが記憶に残っている。組織委員長の矢沢先生のお計らいで一席設けて下さり、関先生ともども楽しい一夜を過ごさせて頂いた。

次にお会いしたのは1984年秋、武漢での第2回中国熱測定討論会(STTT)である。小沢さんと私が特別講演を行い、想像以上に暑い武漢と中国熱測定討論会の活気を初体験した。ここで日中合同シンポジウムが具体的に議論され、第1回は浙江大学で行い、組織委員長として巖教授を推したいことなどを提案された。この提案は熱測定学会で正式に承認され、第20回討論会の記念行事の一つとして1986年に実現した。胡先生はSTTTの会長として、運営の細かい点にまで気配りをされていた。写真2は開会式で挨拶された胡先生で、私の記憶の中で最も活気に満ちたお姿であった。4年後に近畿大学で行われた第2回合同シンポジウムでもお元気な姿をみせられ、すぐに数多くの知己を作られたようである。その後、しばらくして胡先生が脳梗塞で入院されたとの知らせに驚いた。急いで見舞いのお花を届けるよう関教授にお願いしたが、リハビリに相当の期間が必要とのことで、暗澹とした思いであった。半年ほどして胡先生からお礼のお手紙を頂戴し、いつものながらの内容にホッとしたのを憶えている。

1992年秋、鄭州での第6回討論会に、ぜひ夫人同伴で来ないかというお誘いが河南大学から届いた。指示通りまず北京に着き、宿舎に案内されて休息していると、突然胡先生ご夫妻が訪ねて来られた。想像以上にお元気で安堵の胸をなで下ろしたが、やはり記憶力が弱ったと嘆いておられた。その夜ご馳走になった北京ダックは忘れられない。鄭州は汽車の方が遙かに便利で、北京から夜行列車と一緒にしようとするに切符を手配しておられた。初めて経験する寝台列車であったが、一室4人で、胡先生は絶えずにこやかに不安げな我々を見守って下さった。いつものながらのきめ細かいご配慮のお蔭で快適な一夜を車中で過ごし、早朝、車窓から眺めた黄河の雄大な景観は忘れ難いものであった。胡先生との最後の出会いになるとは夢にも思わずに。

人は信じなければ生きて行けない。信じ合って始めて世界は成立する。しかし、こんなに信頼し合えた外国人は数多くない。写真1に写っている人の多くがすでに教授に昇進していて、化学研究所熱グループは着実に前進している。念願の日中合同シンボも軌道に乗り、多くの科学者の相互訪問が可能となった。胡先生としては、やるべき計画を果たされ、後は若い弟子達の成長と努力にすべてを託されたようである。日中の架け橋は見事に成功し、胡先生は静かな幕引きをされたのである。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌。



写真2 日中合同シンポジウム開会式の胡先生